
セカイはカワラナイ

邪魔者A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカイはカワラナイ

【Nコード】

N2808Y

【作者名】

邪魔者A

【あらすじ】

元の世界「イブ」にて、世界の残酷さや醜さに蝕まれ、その存在すら人間でなくなってしまった少年、黒井 海斗は突如として、異世界に飛ばされる。

そこで知らされる自分たちの居た世界の崩壊。記憶を失いながらも自分の今できる最善の努力をしていく少年とその少年の荷物として遣わされた天使、レリエルの物語…。

主人公最強ものです。たぶんハーレムはありません。

拙い文章と内容ですが、改善していこうと頑張りますので、

応援よろしくお願いします。

プロローグ

世界はいつだって一緒だ。

弱者は虐げられ、強者に都合よく作られている。

しかし、それを嘆いたところでどこの世界でも、

人間という存在の本質が変わらないのだから、同じことである。

そう、世界は理不尽だ。

生まれたその時から武器を持たされ、

戦えなければ殺され、戦っても勝たねば殺され、明日を掴むのに苦
労する奴がいる。

かたや、怠惰な日々を消化し、明日を、未来の重要性に気づかない
奴らもいる。

ああ、気味が悪い。

だが、まあ、そんなことどこにでもあるだろう。

きっと、今俺が飛ばされたこの世界にも……。

気がつくと、何やら見覚えのない場所に居た。

見上げれば、金色のカーテンの掛かった空。

周りを見渡せば、一面に広がる草原、そして奥に見えるひとつの神殿…。

全く、どこのゼル。の伝説ですか…。

「…痛ッ、ここどこだよ？」

何やら俺は自分の名前も覚えていないらしい…。

迷惑な話だ。

なんて思っていると、目の前に見えない何かが集まり、発光する。

「…ん？あんた誰？」

次に目を開けるとそこには2対の翼を持った、金髪青眼の白い服を纏った女性が居た。

「私はこの世界『エデン』にいる神々より貴方の世話係を仰せつかった、

夜を司る天使、レリエルです」

「ふ〜ん、で、俺は何故こつちの世界に飛ばされたんだ？」

「端的に述べますと、この後に私と共に行く世界『リルバ』を安定させてもらうためです。」

あなたの居た世界『イブ』はまもなく崩壊、消滅します。

そこでイブにいる人間たちを転送魔法で、リルバにて生存させようと思うのですが、

神は直接人々に関われないため、代役として貴方に領地、食料、資金を集めてもらいます。

その過程で、大規模転送魔法によって起こる世界への弊害を解決してもらいます。

また、あなたと同じような人が今、3人ほどいらつしゃいます。いづれの方にもどなたかの神から力を授かることになっています、が

あなたには神が扱いきれなかった力の一部を授かる事になっております。

ご了承ください。」

「ふーん、まあ、協力するのは一向に構わないが…何故俺なんだ？」

「説明しなければいけませんか？」

時間がもつたいないとでも、言いたげにそう言うレリエル。

「ああ、こつちに來たせいか、名前が思い出せん」

「そうですか、では、ご説明いたします。

まず、あなたの名前は黒井海斗クロイカイトと言います。

貴方はその身体に生体科学兵器『碎牙サイガ』を搭載し、

その効果、人間とは思えぬ演算能力、記憶力、回復力、身体能力更に、質量をエネルギーに変える力を宿していることで、

実質的な強さでは貴方が世界一です。
故に選ばれました。」

「なるほどねえ、了解。俺はそういえばそんな名前だったな」

「……………ひょっとすると、記憶全てをなくされましたか？」

さつきまでとは打って変わって彼女の素の心配が伺える。

「ああ、まっ、エピソード記憶だけしか失ってないみたいだから、
気にするな」

「そうならいいんですが…、では、これから力を貰いに行ってもら
います」

そう言うのと、また見えない何かが集まり、今度は俺を飛ばす。

次に目を開けると、周りは薄暗い洞窟になっており、目の前には黒
い球体があった。

「汝が我の力を授かるものか？」

「どうやらそうらしい、やれやれ、全く、迷惑な話だ」

「先に説明しておく、貴様が私、つまり世界の闇の権化に触れ、
受け止めた闇の分だけ力となるが、

その過程で心が飲まれれば即終了、お前は我に取り込まれる。

反対に貴様が全て受け止めれば、我は消え、貴様は神をも凌駕す
る存在になる」

「ふうん、実に魅力的なお誘いだな。よし、乗った。」

どうせ、今ここで悩んでも仕方ないのだ。

それよりも早く俺の本来の力が出せないことが嫌なのだ。

「では、始めるとしよう」

黒い球体がそう言ったあと、俺がそれに触れると俺は真っ暗な空間にいた。

「ここが我の中、どうだ？気分は」

禍々しく、人間のマイナスの感情が垂れ流されてる感じだ…。

・ 暴食、色欲、強欲、憂鬱、憤怒、怠惰、虚飾、傲慢、虚偽、嫉妬・

様々な感情が俺に流れ込んでくる。

「まあ、この程度って感じだな…」

「ほお、あながち嘘でもなさそうだのう。

初めてじゃ、お主のような闇をもともしない者はな。」

いや、俺はものともしてないわけじゃないんだが…

俺は元々の自分の優しさの感情を分離させ、それを持って闇を受け止め、

それが自分に害なさぬよう、碎牙で徹底的に否定している、ただそれだけの話だ。

「なあ、俺はあんたの力全てが欲しいんだ。全力で来てくれないか？」

「ほお、つまり神を超えたいと？」

「ああ、これからどうせ俺は神と取引しなければいけない時があるだろう。

取引とは対等の立場にあつてこそ、できるものだ。」

「よかるう、では、全ての闇を受け止めてみよー!」

その言葉と同時に一気に恐怖に襲われる…。

様々な人、生物の感情が流れ込んでくる…。

「ガッ…グッ、…コ、コ…ギッ…」

コワイと発狂しそうになるのを必死に止める、ここで負けては終わりである。

しかし、徐々に侵食されていく俺の脳に何か引っかかるものがあった…。

俺には『守りたいもの』があつた？

そう、何か誰かはわからないが…確かに、明るく、俺を照らし、命を助けてくれた存在が

目に浮かぶ……、そうだ、俺はこいつの為に生きていたんじゃないか…。

俺の存在を初めて認めてくれた、自分の命をなげうつてまで俺を助けてくれた…。

名前は思い出せない、そいつの笑顔を俺は守りたくて…生きていた。

「お、俺は…こんな所で果てるわけにはいかない…。

俺には守りたい人がいる…、だから、だから、お前らごときの闇なんざ

全部受け止めてやるよ！…！」

気が付けば、言葉に出ていて、叫んでいた…。

それから侵食されていた俺の脳は復活し、それからはただひたすら時間が経過した。

何時間たっただろうと思ったところで、急に闇は引いた…。

そう、全て吸収し切ったのだ。

そして流石に俺も疲れた…。

終わったので取り敢えずその場にへたり込む…。

「はあ~~~~、疲れた」

「まさか、本当に全てを受け止めるとは…恐れ入った」

「ん？どこからだ？」

明らかに先程の黒い球体の声が聞こえたのだが、姿が見当たらない。

「お主の中じゃよ、といつてももうすぐ消えるかの。

所詮、誰かに授けるまでの場繋ぎがわしじゃ。

では、お主に説明だけしておく、心して聞け。

まず、この闇の力は基本どんなものにも勝てる。

そして所有者の想像したとおりに形状を変化させ、具現化する。

しかし、この力を消費し続けると、心が喰われていく。

それを防ぐにはしっかりと信頼できる仲間を連れておくことじゃ。

そうすればお主が暗くなつて行こうとも安心してもとに戻る。

しかし、一気に力を使いすぎるとお主は闇に飲まれ、暴走するじやろう。

それを誰も止められず、時間が経過したなら、悪魔になる。

力は倍以上になるが、最早、そこに自我などない。

ただ感情の赴くままに行動するようになるだけだ。

お主がそうなると間違いなく世界が滅ぶのは確実じゃ。

そう成らんようにせいよ、あと貴様に宿っているもう一つの人格だが、

リルバに降りれば起きるじやろうと思う。

心配せんでも、お主は強い、だから道を間違えぬよう頑張るのじやぞ。

では、さらばじゃ」

そう言つて老人の声は消えた。

全く、俺にもう一つの人格、つまりは碎牙によって構成された人格が、

発動してないとこまでわかるとか… すごい老人。

まあ、何はともあれ終わったので、取り敢えずレリエルのところに帰る。

また、草原の方に帰ると、何やら不機嫌そうに眠そうにレリエルが立っていた。

「終わったのですか？」

「ん、終わったぞ。なんか強力な力らしいけど。
てか、ずっと待ってたのか？大丈夫か？」

「元より神を凌駕すると言われる力です。心配ありません。
ハイ、ずっとあなたを待ってました、同僚に馬鹿にされながら…」

「同僚もその選ばれた人と降りるみたいで、調子に乗ってました…」
どうやら同僚に馬鹿にされたのが気に食わないらしい…。

「ごめんな、俺が遅いばかりに…」

「いえいえ、別にいいんですけど…、えっと、じゃあ、これからリバに降ります」

そう言うと、何やら唱え始め、魔法陣が下にできる。

そして、それが紫色に発光する。

次に目を開けたときには、俺たちは空にいた…。目測で地上500m。

夜、紅と蒼に煌めく二つの月、満点の星空、そして下はのどかな森と川、

そして俺たちはどうやら重力には逆らえないらしい…。

徐々に落下し、速度が上がっていく。

レリエルの方を見ると、翼は失くなっており、本人もだいぶ焦っている。

「ちょ、おま、なんの嫌がらせッ！？なんで空中？」

「わ、わ、わ、わ、私だって初めてリルバに降りるんですぅー！！しかも、まだ転送魔法には慣れてなくて…って、キャッ！！」

何やら、レリエルはまだ天使として未熟らしい、そして魔法に失敗したと…

そして、高所恐怖症か知らんが怖いので俺に抱きついてきたと…

全く、先が思いやられる…。

こうして、異世界から送られた少年と未熟な天使の物語は始まりを告げた。

しっかし、どうやって着地しようかな（笑）

ブログ（後書き）

まだまだ拙い内容ですが、応援していただけると嬉しいです。
更新は気まぐれですので、ご了承ください。

異世界での初夜 前編（前書き）

2 話目です。

内容ごちゃごちゃでわかりづらいと思いますので
のちのち、説明話を儲けたいと思います。

異世界での初夜 前編

澄み切った夜空…そしてそこにある不自然な人の影…。

「キャ〜〜〜!!」

「うるさい、少し黙れ」

全く、天使の癖に高所恐怖症とかどんなネタですか。

黙ったのは言いが、今さっきより強く抱きしめてくる高所恐怖症の天使、レリエル。

何故、こんな上空にいるかと言えば、原因はこいつである…。

しかし、まあ、魔法に失敗しただけらしいので、許すとする。

次に、これからどうやって着地するか、どうしたものか。

そういえば、さっき老人がこっちの世界ならアイツは働くと言っていたな…。

この場で言うアイツとは、俺の搭載された生体科学兵器『碎牙』の作り出した

俺のもう一つの人格のことである。

俺とその人格、碎牙は意識を融合させることで、その本来の力を発揮できる。

しかし、これは少し面倒だ。俺の容姿は極端に変わるし、能力も格段に上がる。

だが、それ以外方法がないので、とりあえず呼び覚まさせることとする。

「働け、碎牙」

これが碎牙を起こすキーワードである。

これを他ならぬ俺が言うことで碎牙は起動する。

（ん、やっと反応したか、やっぱ異世界ってのは不便だねえ）

（下らん事言っていないでとっとと融合しろ、結構時間が惜しいんだ）

（了解、んじゃ、始めますか）

碎牙がそう言うのと、俺の容姿は先程の黒髪黒眼から打って変わって、

髪は群青色に染まり、長くなる。眼は紅色に変わった。

そして何より、俺の感覚が研ぎ澄まされていく。

「えっ、海斗さん？何か風貌変わっちゃいましたけど…大丈夫です

か？」

などと、的はずれな質問をしてくるレリエル。

「ああ、大丈夫。詳しくは後で話すから…それよりその川にダイブするから」

「はい、つてええっ！？このまま川にですか？」

「ああ、服はまた後でなんとかするから。怪我しないようにちゃんと左側にしがみついとけよ」

「えっ！！ちよっと、困りますう…、でも、まあ仕方ありませんね」

何やら服が濡れることが嫌なようだ。

だが、まあ、現状どうしようもないのでスルーする。

そうこうしているうちに、最早あと数mに迫った水面。

そして衝撃。ドボバシャーン！！

明らかにえげつない音だったな今の…。

そして俺の身体は水面に打ち付けられ、右半身の大体を粉碎骨折…。

レリエルを守るために使った左は全身打撲に収まっている…。

そしてとどめと言わんばかりに水底にあった岩にぶつかる…。

ドゴツ…っと頭と背中に痛みが走る…。

ああ、背中が結構ヤバイ、岩が刺さった感じた。

頭からも結構大量に血が出ている…。

ちなみにレリエルはさっき水面に当たり、水中に入った時点で離している。

今は何やら水面でもがいている…。

アイツ……カナヅチだったのか…。

全く、世話の焼ける……天使さんだこと…。

最早、普通なら動かない体を無理やり動かして、助けに行く。

「ぷはあ！！おい、大丈夫か？たく、カナヅチなら早めに言っておけよ…」

とりあえず、レリエルが楽なように、血が一切流れていない左手で軽く、抱きしめる。

「ガハッ、げほっ……はい、すいません……、って海斗さんの方が大丈夫ですか!？」

「ん？結構きつい、でも、とりあえず陸に上がらないとな」

「そうですね、でも、なんか目の前に滝が迫ってますよ?」

レリエルの言葉通り、俺たちが水中でもたついている間に、俺がもう眼前に迫っていた。

心の中で舌打ちをする……、さすがの俺でもこれ以上は一旦能力を使いたいんだがな。

しかし、無情にも俺はもうすぐそこである。

「レリエル…ちょっと、嫌だろうが俺に捕まっとけよ!!」

その言葉の後、レリエルが俺の腕を掴む力を強めたかと思うと、俺たちは真つ逆さまに落ちた。

途中、崖の出っ張った部分が幾つかあり、レリエルを庇うのが大変だった…。

下の川に落ちたときには、俺の身体は身がえぐれ、最早全身血まみれだった…。

だが、レリエルはなんとか無傷なようだ…。少し、俺の血が掛かっているが、

どうにか守りきれたというところだろう…。

「海斗さん、海斗さん、しっかりしてください!!」

俺にはもうそのお呼びかけに答える余裕はなく、とりあえず近場の陸地に身体を上げる。

そしてレリエルも陸に上げてやる。

それと同時に俺はぶっ倒れ、意識はなくなっていく…。

さすがにもう能力を使わないと無理だな…。

そう思い、砕牙の能力の一つを発動させる。

それは絶対的な回復、いや、最早構築といったほうがいいだろう。

俺の身体は効果を発動させたと同時に、メキメキと細胞が活性し、修復されていく。

そして、ものの数分で俺の身体は先ほどと変わらぬ負傷の度合いまで戻っていた。

「えっ！？何が、どうなっているんですか…？」

すぐに治っていく俺の身体を見て、驚愕を隠せないレリエル…。

そりゃ、そうだろう。目の前にピッコ。みたいな奴がいるんだから。

「んゝ、ああ、いや、砕牙の能力の一つだよ。

久しぶりだから加減して直してるけど、本来は一瞬で全回復まで持っていけるよ。」

（ただし代償として自分の自我をすり減らすかな…）

「海斗さん凄いです！！やっぱり、流石神々に選ばれただけはありませんね。

そういえば、海斗さんの友人も選ばれていましたよ。」

それを行った瞬間、レリエルの顔は真つ青になっていく…。

「えーっと、今言ったこと聞かなかったことにしてもらえますか…？」

「俺は疲労のあまり何も聞いていませんよ。」

「ありがとうございます！！」

どうやら神々様とやらに口止めされているらしいな…。

できれば、少ししかない前の世界の記憶が欲しいんだが…、まあ今はいい。

「それはいいとしてこれから俺は具体的に何をすればいいんだ？」

「えーっと、ですね。とりあえず、最寄りの街のギルドにでも入っていただいて、

地道に冒険者として名を上げるもよし、王国騎士に志願してみるもよし、

放浪者として世界を回るもよし、基本的に自由です。

あつ、でも悪事だけは働かないでくださいね？

そうになると、怒られるのは私ですから…。」

「ふーん、どれも俺には向いてなさそうだな…。

まあ、考えていても仕方ないし、野宿の場所でも探そうか？」

「そうですね、ヘックチュン！！えっと、スイマセン」

「いや、俺の方こそごめん。全く、気を遣えてなかった。」

そう、今はもう夜、そして俺もレリエルも相当な時間水に浸かっている。

そしてレリエルは白い服一枚だ。若干、透けているのは見ていないことにしていたが…。

ちなみに、俺はというと学ランは改造していたので傷がいつているぐらいだが、

ズボンは最早、ダメージジーンズのそれより酷いものになっている…。

とりあえず、寒いだろうから俺の学ランを貸してやる。

「ほら、それでも今は着て我慢しておいてくれ、すぐに休めそうな洞窟探してくるから。」

「あつ、いえ、そんなの悪いです。海斗さんのおかげで今こうして無傷でいられるのに…」

「いいから、いいから。気にすんなって、じゃ、ちょっと待つておいてくれ。」

そう言うてできるだけ早めに洞窟を探そうと、だいぶ流されてきた川沿いに走る。

(さて、この紅い眼…、『アギト』の出番かねえ……)

俺のこの今の紅い眼、通称『アギト』は言っしまえば便利な眼である。

暗闇でも普通に見える、相手のだいたいの能力もわかる、嘘を見分けるとか体温とかもわかる。

これはあくまでも碎牙を作ったときに付属で作られたものらしい。

つと、まあ、解説をしている間に俺たちが落ちてきた滝の裏に手頃そうな洞窟があった。

（さてつと、洞窟も見つかったし、一旦レリエルを呼びますかね）

そして来た道を帰り、レリエルが居るであろう位置に近づくと…何やら面倒な連中がいるみたいだった。

遠くで『アギト』を起動させ、更に極限まで自分の聴力に意識を集中させる…。

「おい、姉ちゃん。そんな薄着でこんなところに一人でいるなんて…誘ってんのかぁ？」

「い、嫌…やめてください…」

「やめてください…だぁ？そんなことこの世で通じると思ってるのか？あぁ？」

「そう、この世は弱肉強食、強い奴は何やつても許されるんだよぉ！…」

「ヘッヘッヘッ、さすがアニキ完璧な悪ですねえ」

「当たたり前えよ、さて…じゃあ折角の上玉だ…頂くとするか…」

体温が下がっているのもあるのか、レリエルの口調は弱々しく、顔色も悪い。

そして見たところ、盗賊を生業としていそうな連中の人数は3人…。珍しく俺と同じ意見を解く奴…、そいつが親玉だ。

全員、何らかの武器を持っているが…なにせよ、今の俺にとっては相手にとって不十分すぎる…。

「嫌、嫌、嫌、来ないでえ!!」

「ゲエッハッハッ…、そんなこと言われるとより興奮しちまうなあ…」

全く、いつの時代も欲に溺れ、力を振りかざす下衆はいるもんだなあ…。

さて、もうそろそろ助けてやらないとレリエルが可哀想だな…。

だが、俺はヒーロでもなければ、スターでもない…確実にあいつらを殺れるタイミングまで待とう。

メキッ！バタッ！

っと、慣れない裸足で逃げ回っていたレリエルが何かにつまずいた

みたいだ…。

すると、あっという間に両手首をロープで縛られて、木に括りつけられたレリエル…。

「ハア、ハア、捕まえたぞ…。何をされるかは…分かっているよな？」

「い、嫌です…貴方たちのなんて…嫌です!!」

「なんだとお？オマエ、今の自分の立場わかってんのか？ああ？」

バシンツ!!…ボスのような奴からビンタが繰り返される…。

それを見たと同時に俺の身体は自然とそこに向かって一直線に走り出す…。

あゝ…、何やってんだか…俺の目の前で女子に暴力をした時点で、

俺は意識せずともそいつらを殺しに行くというのに…。

「アニキ、俺からヤツチまっていいですか？」

「いいぞ、俺はこいつが苦しむ姿が見たいからな…、って…ん？誰、グハツ!!」

暗闇の中を迷わずに対象に向かって、全力疾走した俺はそのままの勢いで飛び上がり、

そいつの首に蹴りをいれ、そいつの首は見事にグキリッ、と音を立てて砕け、そいつは地に伏した…。

「な、なんだ、おま、ゴホッ、オエッ！！……………」

続いて、俺は宙に浮いた状態で体の向きを変え、

手頃そうな奴に踵落とし、そして回し蹴りをくれたやつた。

「お、オマエ…よくも…死ねエエエ！！」

何やら決起した最後の盗賊がギリリと光るナイフを向けてこっちに来る…。

全く、そんななまくらで襲ってくるなんて…論外だ。

パキンッ！！バシュッ！！ブシャァー……………！！

そのナイフは俺の人差し指と中指の間に挟まれ、砕け、

そのまま右のボディーパーをに入れてやると、見事に相手の腹に穴が開き、鮮血が周りに飛び散る。

はあ…、こっちでも人を殺ってしまった…。

祝！！異世界で初めて殺人しましたで賞！！とか自分の心の中で作りながら、

捕まっていたレリエルの元に向かい、括られていたロープを解く…。

「悪い、遅れた…。大丈夫だったか？怪我不い……。っと」

何故、俺の言葉が途中で途切れたかというレリエルが抱きついてきたからである…。

「怖かった…、怖かったですう…」

その後はうわぁーんと泣き出す始末…はぁ…、面倒だ。

この世界の夜が長くなければ、どうなっていたらろうと…つくづく思った。

異世界での初夜 中編（前書き）

相変わらず、文章力がない…orz
まだまだ勉強不足です。

内容は乱雑になっておりますので、また書き直すかもです。

異世界での初夜 中編

あれから数十分後……。

今まで嗚咽しながら泣いていたレリエルは、泣き止んだかと思うと眠ってしまっていた。

（はぁ……面倒だなあ……）

そう思いながらも先ほど見つけた洞窟へと向かう……。

そして、もう洞窟に着くか、というところでレリエルが起きた。

「……はふう……、むにゃ？あつ、おひゃようございましゅ、海斗しゃん」

……いくらなんでも噛みすぎだろうよ？うん

ちなみに今のはきつと、おはようございます、海斗さんと言いたかったんだろう。

「ん？悪い、起こしちまったか？」

「いえいえ、そんなことはありません。それに私の方こそ、さっきはすいませんでした!!」

「いや、あれは俺の方に落ち度があった、悪い。

ところで、レリエル、この世界の魔法の仕組みってどうなってるんだ？

来るときに使ったのが転送魔法だろ？」

「はい、あれは天使しか使えない魔法陣だったんですよ。普段、仕事でリルバに降りる時は私たち翼がありますから。えーっと、仕組みについてなんですが、

まず、この世界「リルバ」にはイリスという気体が有りまして、それはどこにでもあるものなんです。

それを触媒とし、自らの魔力と精神力を糧に魔法を作り上げ、発動させるんです。

ですから、今の海斗さんでも物質移動とか簡単な波動ぐらいなら使えますよ、きっと」

「…………ふーん、ということは今の俺でも物質を動かしたり、集めたりはできるんだな？」

なら、焚き火もしたいし、巻を集めることとしますか…。」

それからの俺の作業は地味になるかと思われたが…、

腐っても面倒臭がりな俺だ、いい方法を思いついた。

方法は簡単、手頃そうな枝を取り、魔力を流しながら思いっきり振る。

そして波動？的なものを流して幾つかの木を纏めてきってしまったおうという作戦だ。

それをレリエルに伝えたと、できないことではないらしいのでやってみることにする。

「んじゃ、力を込めてっ…こんな感じか？」

手始めに適当に魔力を流す練習を試みる。

そうすると、俺が意識を集中させた右腕に何やら青白い煙みたいなものが集まってきた。

「す、凄いです！！山奥でイリスの濃度が高いのもありますが、何よりそこまで高純度で大量の魔力を一気に出せる海斗さんが凄いです！！」

その光景を見て、目を輝かせているレリエルの反応を見る限り、どうやら俺はかなり魔力が高いらしい…。

「んじゃ、早速試してみますか…」

それから俺は手頃な木の枝を拾うと、何故か知っていた剣の構えで準備する。

そして魔力を流し、それを枝にも流す…。

「スウー……ハッ！！！」

深呼吸をして、脱力し、次に一気に力を込め、枝を振り抜くと…。

ガラガラガラガラ…と近くにある木だけでよかったのだが、結構遠くまで届いてしまったようだ。

「……あちゃー、やつちまったなあ、俺。」

「……海斗さん、本当に異世界の人ですか…？」

「それ以外考えられないんだが？記憶ないし」

「そうですねえ……、もう化け物を通り越して、どこかの龍レベルですね…」

「そうなのか？そんな凄いことじゃない気がするんだが…、まあ、取り敢えずあの巻たちをこっちに持ってこないとな…。」

しかし、いまいちどうしていいのかわからない俺……。なんて情けない。

「えつとですね、物を集めるには自分の手の平に魔力を集中させて、そこに集めたい物を想像すれば自然と集まります。魔力の量によって範囲は変わりますが…。」

レリエルに言われたとおりに、手のひらに魔力を集中させ、巻を集めようと想像する。

すると、カタカタ…ガチャガチャガチャガチャ……っと次々に巻が手の近くに集まっていく。

「ほえ…便利なもんだな、魔法って…」

「それは貴方だからそこまでのことができるんですよ？わかってますか？」

「いや、その割に驚いてないじゃん。まあいいや、どうでも面倒だし。」

何やらそのあと、俺が巻を全て今日野宿する洞窟に入れ終わるまでムスツとしていたレリエルであつたが、俺なんか悪いことしたか？まあいい。取り敢えず、焚き火でもしてやらないと体が冷えきっていることだろう。

「レリエル、なんでそんなムスツとしているかわからんが、俺が悪かった、すまん。」

それからレリエルは少し頬を染めながらも、

「別にいいですよ。もう気にしてませんから。」

と言って、許してくれた。

「そうか、ありがとう。で、火を起こす魔法ってどうやって使うんだ？」

「えーっとですね。こう物が燃えるように物の周りに魔力を集めてボワツと……」

「……悪い、わからん。」

流石に今の説明でわかったら苦労しないのだ。

「うーん………すみません。私、普通の魔法はあまり使えないんです………」

そう言つて、気弱に言いつつ、俺が集めて、固めておいた巻に小さい火の弾を打ち込む。

それから巻はパチパチ…と言いながら燃え始めたのだが……、

（ホント、今更ながらに普通の魔法があまり使えないとは……）

と、結構心の底から落胆していた俺であつた。

「さて、じゃあ俺は秘密兵器でも作るとするから、レリエルは少し待っておいてくれ。」

「えっ……、待ってないとダメですか？」

俺としては布団だの、風呂だの、タオルだの、洗面道具だの、色々作りたいたいものがあるんだが、

今さつき、レリエルは盗賊に襲われたところなのだ。さて、どうしたものか。

これで俺がどこかの小説とかの主人公なら一緒に行こうと遠慮なく言っただろうが…、

俺はそんな心優しい人間じゃないしな……。

「じゃあ、結界でも張っておこうか？何となく張り方分かるし」

今さつき魔力の使い方を練習したときに思っていたのだが、

これをどこかの空間に固めたら結界にできるのでは？と

「あつ、はい。お願いします……。」

何とか了承してくれたみたいだ。我ながら酷いやつだ。

しかし、許してくれたからといってゆつくりと生産しすぎるのも良くないだろう。

素材になりそうなものと食材だけ手に入れたら帰るとしよう。

それから俺は洞窟の入口に魔力を均等に固めると、探索に出かけることにした。

行く先々でこの俺の紅い眼『アギト』に助けられることとなつてしまった。

まず、俺が作ってやりたかったのは風呂だ。

嫁入り前の淑女が襲ってきた奴の臭いがついたまま寝たくないだろう。

次に、布団と服にシャンプー、洗剤、あとは剣とナイフでもあればいいかな…。

そして忘れてはならないのが、飯である…。

そんなことを考えていると、まずキノコがやたら滅多ら生えてるところに来てしまった。

（うわぁ、毒キノコとか当てたくねえな…）

そして迷うことなく『アギト』起動。

そしてキノコをあさり、一段落したかと思うと、

今度は暗闇から五メートルは在ろうかというクマに、その隣には巨大な猪……。

俺、なんか悪いことしましたか…？

取り敢えず、取れたキノコを直す場所が欲しかったので、初めて闇の力を頼ることにした。

派手に力を使うとやばいらしいが、四次元ポケット代わりに使うくらいなら問題ないらしい。

それからキノコを直すと、クマと猪からの猛攻……。

爪で引っ掻いてくるわ、噛み付いてくるわ、突進して来て、牙振り回すわ……。

全く、人をなんだと思ってやがる！！（敵以外の何ものでもないだろう）

俺がこの眼とこの運動能力もってなかったらどうする気だよッ！？
（殺す気です）

つてな感じで見事に、あれよ、あれよ、と避けていると次第に両者？ともにはててきたので、

俺は咄嗟に手刀で

猪の牙の片方を折り、猪に突き刺し、その次にクマに突き刺すと…
何とか倒れてくれた。

いやあ、なんという達成感！！

よくある一発喰らえば即死ゲーをクリアした気分だ。

それからその死体を有効利用するために、

即席で作ったナイフではぎ取れるだけ、はぎとった。

そして四次元ポケットへ

それからまあ、綿花？をみつけたり、シャンプーの原液になりそうな木の実を見つけたりであった。

それで最後に剣だけは作ろうかなと思ったので、大量に木を切り崩す。

それを全て魔力で圧縮し、密度の高い木を作るとまたもや四次元ポケットへ。

余分に切っておいた木々は圧縮してブロック状に、他にも石のブロックを作っておいた。

それを終わると、もう結構いい時間だと思うので帰ることにした。

そして帰るまでの道は四次元ポケット内の物を合成させるのに疲れ

た…。

まあ、その帰る間に作ったものは以下のとおりだ。

・布団セット（敷ふとん、掛ふとん、枕）× 2 + 熊の毛布 × 1

・シャンプー、ボディソープ、リンス、洗剤

・毛皮のコート、真っ黒のコート

・木剣 × 5、石の投げナイフ × 20

・木の浴槽、カゴ、バスタオル × 5、ミニタオル × 5

・男子用制服（あくまで、見た目が同じなだけ）

しかし、俺の服を作ったはいいが……レリエルの着るものには悩む……。

サイズは分かっているので作れるのだが……、正直気が引ける。

下着とかはよくわからんし…。

ってな、訳で本人に聞いてから作るとしよう。

それから俺は絶対怒られるよなあ…と内心諦めながら洞窟へ帰るのであつた…。

異世界での初夜 後編（前書き）

更新遅くてすいません。

文章も拙いのでアドバイスもらえると嬉しいです。

異世界での初夜 後編

洞窟に帰るまでに自分の前までいた世界、こちらで言う『イブ』の時の記憶を、

碎牙のメモリーを開き、思い出してみた。

どうやら俺は、この体格と風貌に沿った学生だったらしい。

そして俺の父？ともかく、この碎牙は父親によって開発され、俺に搭載されたようだ。

生まれた時より才能には恵まれていたようだが、感情系に難があったらしい。

いわゆる喜怒哀楽のどれも俺にはなかったようだ。

ただ生きなければならぬという使命感、そして俺にとって大切な人の笑顔を護る。

それだけを背負って生きていた……らしい。

そのために結構えぐい仕事、つまりは殺し、窃盗などもしていたようだ。

これには納得がいった。

先ほど、俺が盗賊三人組を殺したときに「また殺してしまった……」と、

自然に思っていたからだ。

友人関係も探ってみたが誰一人としてデータが残っていない。

しかし、俺にとっての家族？なのだろうか。

姉と妹と思しき人物の存在はデータにあった。

だが、容姿も性格も特徴も思い出せない。誰一人として。

なぜだろうか？このほぼ完璧なコンピューターのメモリがそんなにやわなはずがないのに……。

そして今俺の中に浮かぶ一つの可能性……。

（闇に……闇の力を受け入れたときに……喰われた？記憶を……）

それ以外には考えられないのだ。

水素爆弾でも中性子爆弾でも太陽に落とされても絶対零度の中でも、絶対に機能し、消滅しないこのシステムが壊れるなんて……考えられないからだ。

とりあえず、記憶消滅の原因が闇の力だったとして……俺はその記

憶を取り戻せるのだろうか？

ひょっとしたら、そいつらもこの世界に来ているのではないだろうか？

確率的に……高い……と何故か思ってしまう……。

それほどまでに優れた友人でもいたのだろうか？

それなら最初に俺がレリエルとだけ、この世界に降りた理由も、闇の力を与えられたのも納得いく。

俺とその友人、仮にAと置こう。

そのAと俺では俺の方が能力が高く、俺と友人Aの共通の友人は強制的に友人Aの方に行くだろう。

そして何故、俺が闇の力……神でも手に負えなかった力を任されたか。

それは厄介もの払いといったところだろうか、と推測する。

そんな手に負えない力、自分たち神のいる世界にあっては気が気でないだろう。

それをこれから異世界に降り、仲間も居ない俺に押し付けることで、違う世界、つまりは『リルバ』に危険を押し付けたわけだ。

要するに俺は有能すぎるが故の邪魔者なのだ。

全く、能力が高すぎるのも問題だな。

しかし、逆に述べれば俺に宿る闇の力はそれほどまでに危険で、強力なことがわかる。

なら、その与えられた力、使いこなしてやるさ。

それが今の俺のため、異世界から来たもののため、アイツのためである。

ちなみに今の俺は黒髪黒眼の状態なのだが、その気になれば蒼髪紅瞳ですつとすることもできるらしい。

その間も『アギト』は発動しようと思えば出来るし、エネルギーを質量に変える力も使える。

エネルギーを質量に変える力……とずっと思っていた能力も実際には、能力の一部なだけで。

本来の能力は理解したエネルギー全てを制御、破壊、再構築する能力だそうだ。

……我ながら思う、チート以外のなにものでもない。

よって、今の俺は魔法など使わずとも結構なものを自由に操れるのだ。

遠隔操作も出来るらしい。

まあ、実はこの世界に来てからずっと高熱が出ていたことに今、気

づいた俺には

そんなこと出来そうにないがな。

さて、取り敢えず砕牙をあさるのもこの程度にしておこう…。

えっ？なんでもう弄らないかって？それは……………洞窟に帰ってきてしまったからです…………。

レリエルにどの面下げて会いましょうかねえ…………。

なんて洞窟の前で考えていても仕方ないので、取り敢えずなかにはいる…。

「ただいま……………っと、レリエル？寝てる？」

洞窟の中に入ると、そこには体育座りで顔を伏せてしまっているレリエルが居た。

しばらくして……………うう……………ぐすつ……………」と聞こえてきた…。

俺の心の信号は最初から赤信号を示していた…。

「レリエル……………その……………ごめんな、一人にさせて……………」

「今更遅いです！！始めから……………始めから私も連れていってくれたら……………」

こんなに……………こんなに辛い思いもしなくて住んだのに……………」

やはり、俺は最低だ。自分が面倒だという理由でまだ俺と同じ……………、

いや、俺より一つ下ぐらいだろうか？の女子を泣かせてしまうなんて。

それも俺が原因で引き起こった事故だというのに…。

それから俺は黙るしかなかった…、いや、喋る内容が幾ら考えてもないのだ。

俺にはそう言った感傷を慰める感情を抱くことは難しい。

なので、行動に移すことにした。

四次元ポケットの中で作った熊の毛皮で作ったコートをそっとかけてやる…。

そして「寒いだろうから…」と言っのが俺には限界で直ぐ様、洞窟を出てしまった。

「ああゝ……我ながら情けない……」

しかし、そうやって俺までウジウジしていても仕方がない。

感傷で時間を使っているのは、まさしく無駄だというのが俺の持論だ。

その持論通り、早速計画していた風呂を作ってみる。

まず四次元ポケットから先ほど取ってきておいた木々のブロックたちを出す。

それを配置するために、石のブロックを川に配置し、水を止める。

その石のブロックで出来た水貯めを温めるために、俺の能力、

質量エネルギーに変える力を使い、そしてそのエネルギーで熱を発生させる。

その熱を石のブロック全てに与える。

それからは石を木の板でコーティングし、周りを木々のブロックで覆えば、

簡略式の風呂場の完成。

そこで石のブロックを徐々に削り、排水口を作り、水を引く。

更に、木々のブロックの内部を分解し、穴を作り、そこに水を引く。

その木々のブロックに熱を与え、水を塞き止めるための木の板を挟めば、

簡易シャワーの完成。

そして木の板を取り付け、シャンプー、リンス、ボディーソープとタオルを置く。

更に違う場所に、バスタオル、着替えを運ぶタメのカゴが入れる窓を作る。

ふう〜……これで簡易温泉製造完了！！

人間、やれば出来るもんだね。

そんなこんなで温泉を作り終えると、泣いていたレリエルがいつの間にかこちらへやってきていた。

「ん？どうした？」

「……その、さっきはすいませんでした……。」

そう言っつてその冷えきった体を俺に預けてくる……。

（いや、俺のせいなのは事実だし……。正直、リアクションに困る。）

しかし、この場でそんなこと言ったらそれこそ最低である。

「俺の方こそ色々と気が遣えなくてごめんな。
結局、身体も冷えきっちゃってるし……。」

そう俺が言っつと、不意にレリエルがクスッ……と笑った。

……こいつ、こんな可愛く笑うんだな……。

「ん？なんで笑うんだ？」

「フフフ……いや、散々今さっき好き放題言わせてもらったのに、海斗さんがずっと私の体調の心配をしてるから……その……凄いなあ……と。」

「…うん。ってオマエ、何気に俺のこと侮辱してないかッ!?
さりげなく、オマエDMだな? って言わなかったか???」

「いえいえ、とても素敵な方だなあ、と(笑)」

「ちょ、おま、絶対馬鹿にしてるだろおッ!?

それ以外の何ものでもないだろッ!?

俺がそう言つとアハハハハハ…と笑い出すレリエル…。

やめれ、眩しすぎるんだよ…。

まあ、これで仲直りつてことなら俺としてはラッキーだな。

「それはそうと海斗さん。この木の建物なんですか?」

「んゝ、いや、身体が冷えてると思ったから簡易的な風呂を作つてみた」

「えっ!? そんなの作れるんですか? 魔法も使わずに…
いや、魔法使つても結構無理かと…」

「まあ、作れたもんはいいいじゃないか。

で、今からでも入ってもらつていいんだが…少し問題があつてな
…」

何ですか? と上目遣いで見てくるレリエル…。罪悪感が…。

「えっと、その言いくいんだが…率直に言つと着替えどうしますか?」

「……………えっ？」

「そのだなあ、とりあえず俺の元居た世界の学校の制服でも作ろうかな…と思ったんだが、

肌着って…どうすんの？っていう……」

それからしばらく沈黙……。

そして数秒後………レリエルは頬を真っ赤に染め…ゆでダコのようになり、そして…。

バシンッ！………予想通り…いい音のビンタを食らった…。

「そ、そ、そんなこと言われても私何もしませんよ！！

絶対、何もしませんからね？？」

その…まあ、…海斗さんなら…別にいいんですけど………」

ん？こいつ、色々と勘違いして拳句、何か方向がドンドンおかしくなっている気がする…。

そして今、自分がまずいことを言ったことに気づいたのか…より一層、顔が赤くなるレリエル。

「いや、まあ…作らなくていいんなら…、どうぞ羞恥プレイ…頑張ってください、ハイ。」

俺、そっち系の趣味はないんですがね…ハイ。」

「そ、それは困ります！！色々と…。そんな露出狂みたいな事…。えっと…普通のシャツに、あとはだいたいの想像で作ってもらえ

たらしいです…。」

露出狂って……こいつの妄想力…豊かすぎるだろ、色々とヤバイわ。しかも、答えがだいたいの想像って…怖いわあ…、この子一体俺に何を求めてるんだい？

「…とりあえず、了解。もう風呂入ってていいよ。すぐ作れると思うから、

バスタオルと一緒に持っていくよ。

中にあるシャンプーとかは自由に使ってくれていいから。」

「あつ、はい。わかりました、ありがとうございます…！」

そう言って風呂小屋？に入っていくレリエル…。

その後、レリエルが風呂から上がり、制服とかがバッチリ大丈夫なのを確認して、

服の洗濯だけするように言い、俺も風呂に入り、上がるまでは何事もなかった。

が……、風呂から上がって、もう寝ようかというときに…問題発生…。

「その…今日、襲われたこともあって怖いので…添い寝してくれませんか？」

上目遣い&赤面でそんなこと言われて、断れるやつがいたらすごいと思った瞬間だった…。

で、まあ、俺とレリエルは背中を向けあって、手だけ繋いで寝ていたんだが…。

寝始めてすぐのことだ…。レリエルが思いっきり抱きついてきた…。

どうやら、俺を寝させないつもりらしい…。

背中に何かあたってる気もしないことはないが…気のせいだと自己暗示をかける。

不意に後ろではふう…幸せ…などと聞こえた気もするが…幻聴の筈だ。

で、その感覚にも慣れてくると、俺はそれからゆっくりと闇の中に意識を飛ばした…。

異世界での初夜 後編（後書き）

誤字訂正、設定の矛盾などございましたら、指摘していただけると嬉しいです。

旅立ち？（前書き）

若干、設定の説明してます。

投稿遅くてすいません…、善処します。

旅立ち？

次の日の朝、俺は起きると同時に固まった…。

なんとということでしょう…、目の前に金髪青眼の美少女が居るではありませんか。

まあ、勿論レリエルのことなんだが…距離が近すぎたのだ…。

もうあと数センチで…危ないくらいに。

一瞬固まり…スルスルと背中に回されていた手を振り払い、朝飯の準備をする。

しかし、ろくなものが作れそうにないので、

昨日、倒した猪肉と拾ってきた木の実たちで適当な汁物でも作るうかなと思う。

こんな記憶消滅した俺でも料理くらいはできるのだ。いや、本当に。

まずは外に出て滝と洗剤で手を洗い、手刀で猪を解体していく。

次に木の実たちの中から、中身が味噌っぽい味のする木の実を取り出し、

今作った鍋に放り込む。え？なんで作れるかって？物質の分解と再構築をしたからです！！

そうそう、そういえばこの能力こっちでは錬金術というらしい。

この能力が存在すること自体驚きだ。まあ、最もここまで性能は良くないらしいが。

そこに水も注ぎ込み、（例のごとく化学反応でつくりましたよ、ええ）

熱を作り出し、加え、沸騰させていく。この熱エネルギーを徐々に与えるというのは、

何回やっても難しいもんだ。

だんだんいい具合に湯が沸騰してきたので、猪の肉と木の実（野菜っぽい）を入れる。

それから数分後……

異世界製ぼたん汁の完成！！

我ながらいい出来だと思う。勿論、味は美味だった。

そうして自分の作った料理に満足していると、目を覚ましたらしいレリエルがこっちに来た。

まだ目を擦っていて、眼は半開き、足はフラフラだが、ちゃんと起きているのだろうか？

「お、起きたか。おはようさん、朝飯出来てるぞ。」

「…………おはようございますう……。……（ニヤリ）」

普通に挨拶をしたかと思えば、いきなり怪しげに笑い、俺に急接近してくるレリエル…怖え…。

そして俺の前で立ち止まったかと思うと、ムギューっといきなり抱きしめられた…。

「はふう…落ち着きますう…。」

いやいやいや、人に抱きついて落ち着かないでくださいねッ！？

しかし、その思いとは裏腹に爆弾発言を投下していくレリエル…。

「やつぱり、私、海斗ちゃんと結婚したいですう…。」

……………はあ？

ちょっと待てよ、一回聴き直してみよう。

「レリエル…今なんて言った？」

「海斗さんの事が好きだから結婚して欲しいと言いましたよお？」

……いやいやいや、はあ？

俺の耳は虫にでも食われたのか？そくに違いない。

きつと、違っ海斗って人に恋しているんだなあ、うん。

それからしばらく固まっていると…、

「女の子が告白してるのに考え込むなんて…悪い子にはオシオキです。…エイッ！」

その言葉が言い放たれたと同時に俺の唇に何か柔らかいものがあたたか…気がした。

「エヘヘ…、これでオツケーしてくれるう？」

……おい、こいつを俺の担当にした神とやら…出てこいやあ！！！！

こんな寝ぼけたら暴走する天使ってどうなんだよ！？ええ！？

しかも、色々手順を吹っ飛ばして結婚とか言ってるぞ？教育不足甚だしいぞ。

「返事くれないのお？私じゃ…ダメ？」

…面倒だ、果てしなく面倒だ…。この選択、どれを選んでも間違いな気がするぞ…。

とりあえず、この危機を回避しなければと即興に考えた打開策をぶち当てる。

「今は…ダメかなあ…。俺が神々に依頼されたこと、つまり、元の世界の人たちが住む国を作るという約束を果たすまでは、ダメかな。」

でも、その時にレリエルがまだ俺のことを想ってくれているなら…その時に考えるよ。」

こんな答えしか返せないけどいいかな？」

俺が考えた、とりあえずの打開策……………延期。

これが失敗すると、結構まずい。

「んゝ、分かったあゝ。じゃあ、その時まで我慢するね？」

レリエルはそう言う俺にもたれかかり、また寝てしまった。

全く、なんだったんだ。

ともあれ、何とか俺の延期作戦は成功したようだ。よかったよかった。

そのあと、しばらくすると今度は普通のレリエルが起きてきたので、

作っていた朝食？のぼたん汁をご馳走し、それから今後のことについて話し合った。

まず、この世界、『リルバ』についての詳しい説明だ。

この世界は計12ヶ国で出来ている。

火の国「アポロニア」

水の国「アクエリアス」

土の国「アースランド」

風の国「エアル」

雷の国「バビロン」

光の国「レミエール」

闇の国「アポカリプス」

氷の国「ルグラス」

鍛冶の国「シャミス」

幻獣の国「カオス」

竜の国「ドラゴニア」

魔物の国「ロスト」

正確に言うと「ロスト」は国ではない。

八つの塔によって形成されている魔物の棲む領域である。

そこから魔物は生み出され、解き放たれるのだという。

今までも何度か侵略しようと試みたらしいが、逆に領土を取られていく始末になり、

結局、その作戦はすべて失敗に終わったそうだ。

そして、この世界が出来てから数百年の間、常にどこかの国では戦争状態が続いているという。

現在では、主に闇と光、風と土が戦争状態にあるらしい。

火と水は現在、停戦会議中。

常に中立なのが雷と氷と幻獣と竜。

鍛冶と土は同盟を組んでいて、土に助力する形で鍛冶の国も参戦。

常に全国に対して敵対なのが「ロスト」である。

これらの国は氷と雷を除けば、二大陸で構成されており、西大陸、東大陸とあるのだが二つの大陸を繋ぐのはたった二つの大きな橋だけである。

ノースブリッジ、サウスブリッジと言うらしい。

このことからこちらでも英語、いや、外来語が存在することがわかるので、

恐らく、この「リルバ」以外にも国が存在するのだろう。

そしてそのほかの国はきつと魔物の国「ロスト」の奥にあるのだろうと思われる。

東大陸に闇、火、水、ロストがあり、

西大陸に光、風、土、幻獣、竜、鍛冶があるといった感じだ。

氷の国「ルグラス」は地図で言うと最北端にあり、

本来、そこにあるはずの海はなく、氷海と奥には氷の壁があるだけで国自体は見れない。

63

雷の国「バビロン」は地図の中央、二大陸の間の海にある孤島で、その国の名前通り、^{バベル}摩天楼に覆われ、こちらも国が見えない。

闇の国「アポカリプス」は北東に位置し、闇の精霊「シャドウ」の影響によって、

黒い霧に覆われている。

ちなみに、現在俺たちがいるのは水の国「アクエリアス」の最西端の未開の森らしい。

そして、今後の方針として俺はまだ魔法を学べていないので、

光の国「レミエール」にあるリルバ皇国、皇都「ハルモニア」にある、

皇国中央魔術高等学院に向かい、そこで魔法を学びたいと思う。

現在の俺の年齢はわからないが、恐らく十五、六なので入学できるはずだ。

リルバ皇国という表現を使っているが、それが実現していたのは太古の昔の話で、

現在では、さきほど話したとおり、バラバラに国が分かれている。

が、この皇国中央魔術高等学校に限っては少し事情が違う。

それは、どの国の者でも魔術を学びたいと思うものは受け入れるという制度だ。

つまり、例えば戦争中の闇の国の生徒であったとしても受け入れるというのだ。

その代わり、それは18才未満の者とされる。

そのため、色々といざこざがあったりするのだとか。

年に一度、全学年で、純粹な闘技大会、魔術大会、合同合宿などな
どがあるらしい。

まあ、そうでもない戦争が学院の中であるわな…。

次に神が俺に与えた試練、

元々俺がいた世界、「イブ」の人間を

こちらに転送、生存させるための領地、資金、食料の調達。

及び、大規模転送魔法の弊害の対処だが、何やら少し事情が違っ
らしい。

こちらに転送させるのは未来ある中学〜大学の人間達、及び、その
保護者らしい。

しかも、日本に限定してだ。

これならばまだ実現可能だ。

そして俺も含めて4人が日本から選ばれ、こちらに飛ばされたら
しいが、

今は8人になっているらしい。

そしてその8人は一旦、その皇国中央魔術高等学院に向かう算段になっているという。

つまり、とりあえずは光の国「レミエール」に向かわなければいけないらしいのだが…、

通り道にある水の国「アクエリアス」は今、半ば壊滅状態だということ…。

ここ数年、魔物の異常発生が絶えず、「ロスト」と密接する水の国「アクエリアス」は魔物の駆除に追われ、数か月前までは火の国と戦争していたらしい。

しかし、俺以外に選ばれた7人を待たせるのは忍びない…。

よって、俺は物騒な国を絶対に、迅速に通らなければいけないのだ…。

ああ、面倒だ。

つと、まあ今後の方針が決まった頃には日が照り始めてから3時間経っていた。

ここで解説をしておくが、リルバの一日は日照時間18時間、日陰時間24時間で構成されている。

一日、42時間…長い。そして夜が極端に長い。

故に、治安が悪かったり、夜でも便利な道具が多いらしい。

さて、今後の方針も話終わったところで、
とりあえず水の国「アクエリアス」に向かうことにする。

そこで、一応旅路？なので身支度をしようとしていたら、

「あつ、海斗さん、一ついいですか？」

と、レリエルが話しかけてきた。

「ん？何ぞ？何ぞ？」

「えーっと、ですね。その先ほど神々の方から念話で連絡がありました、
して、

しばらくの間、エデンの方で海斗さんを含めた8人の様子を見る
と言われましたので、

私も一旦、エデンに帰らないといけません…。スイマセン…。

海斗さんだけこの世界に来るのが遅れてしまいましたが、
あと海斗さんと一名以外はもう既に学院の方へ辿り着いている
んです…。

そこで先に着いた方をどうするかというのを話し合わないといけ
ませんし、

今の私では、明らかに海斗さんの足でまといになると言われ、
私も修行しなければいけませんので…、スイマセン。」

「なんだ、そんなことが。別にいいよ。まあ、死なないように気を
つけるさ。」

「そっちな元気に頑張れよ、期待してるから。」

「ハ、ハイ！！ありがとうございます、私頑張りますね。では、」

そう言うと、レリエルは来る時と同じ魔法陣の光で消えてしまった。

「ふう…、んじゃ、ひとり寂しく、迅速に行きますかね…。」

荷物を全て闇に放り込み、木刀を出し、
黒のコート（石のナイフ装備）を羽織ると、川に沿って歩きだした
…。

……………この時の俺は、まだ知らなかった…。

すぐに俺の存在を広めるような事件がすぐそこに待っていたことを
...

旅立ち？（後書き）

次話の投稿も遅くなると思います…。
すいません。

感想、評価、誤字訂正あればよろしくお願いします。 o r z

始まりの直前（前書き）

毎度のことながら、更新が遅くてすいません。
まだまだ、文章がわかりづらいと思います。精進します。

始まりの直前

レリエルがエデンに帰ってから、俺は少し試したいことをやってみることにした。

まず、この世界リルバに飛ばされてから、俺の眼アギトに少し異変があったのだ。

以前、盗賊を倒したときは一瞬で倒してしまったからわからなかったが、

何やら、ステータス？の様なものが見えるようになっていたのだ。

それが果たしてどのようなものなのか。これが試したいことの一つ目だ。

二つ目は、ズバリ魔法……、いや、魔力についてである。

これはいずれ学べるだろうが、仮にも戦場だった、そして成りうる場所を通るのだ。

自分の防衛手段ぐらい確立しておきたい。

とりあえず俺はその二つを実行することにした。

まず、それには何か…モンスターのものが居て欲しいのだが、
思っている。

40メートル先、緑色の人型の奴を発見！ シ

何か棍棒を左手に持ってるが…近づかなければ大丈夫だろう。

タイミング良すぎだろ…と思いながら、早速アギトを起動させる。

やはり何やら表示された…ええつと……

名称 ゴブリン（緑）

種族 魔族

LV 23

特性 毒無効

弱点 火

……………えっ、これだけ？いやいやいや、何かしょぼくないか？

普通、あれだろ？ちゃんと攻撃力とかスキルとか出るもんだよなあ？

なんて思っていると、一つ重大な事を忘れていたことに気づいた。

俺、こっちに来てから碎牙使いこなしたこと一度もないや…。

現在、俺が使える碎牙の能力は本来の十分の一にも満たないらしい。

だから、傷の治りが遅かったり、情報が不完全だったりするのかもしれない。

とりあえず、この眼はそこそ役立つことが分かった。

次に、未だにこちらの気配すら感じていないゴブリンに色々試そうと思う。

（ ちょっとグロいかもです ）

まず、黒いコートから石の投げナイフを取り出す。

それに自分の魔力を纏わせ、ゴブリンの右手目掛けて投擲する…。

魔力を纏った投げナイフは水色に発光し、目標へと向かっていく。

グギャツ！！！！……………ボトツ…。

狙い通り、右腕に向かっていき、腕を切り落とした後、その軌道に沿って奥にあった木に突き刺さる。

うゝん…、魔力を物体の外に纏わせると結構な切れ味になるんだなあ…。

でも、物体自身は魔力に守られてないと、所詮石のナイフ程度の威力か…。

あつ、でも俺の魔力が凄いなことをレリエルが言っていたが、その影響かもな。

そして、どうやら俺に気づいたらしいゴブリン君が走ってくる。

青色の液体を右腕から垂らしながら…、おえっ…。

次は石のナイフの内部に魔力を纏わせ、左腕に投擲する。

バキッ！！ギギヤアア！！！！グルアアアア！！！！

左手に持っていた棍棒を貫通すると、左腕を…砕いたといったほうが正しいかな…。

物体の内部に魔力を纏わせると分子間の結合が強まり、本来よりもより強固なものとなるようだ。

おそらく人体にも応用できるかと思われる。

そして両腕を失った哀れなゴブリンは俺に突進を仕掛けてくる。

さて、最後の実験だ。

俺は闇から特製の木刀を二本出し、それを両手に持つと、それに魔力を纏わせる。

本来、一メートルしかないその木刀は、水色の魔力の刃を延ばし、五メートルぐらいの大剣と化した。

その二本の魔力の大剣を下から上へクロスさせるようにしてゴブリンを斬る。

その後、声すら残さず肉片と化したゴブリンは最早、原型を留めていなかった。

…俺の魔力が強いのか、木刀が強いのか、ゴブリンが弱かったのか…。

恐らく、最初の答えだろうと思う。

そして青い液体になったそれに眼を向けると、アギトが起動し、

注意！！ 血液は麻痺効果を持っており、浴びすぎるとしばらく体が動かなくなる。

おお、便利な眼だな、おい。といっても、俺に麻痺や毒なんて無意味なんだがな。

しかし、ゴブリンの癖に、麻痺効果って…やるなあ。

貰っておこう、いずれ麻痺武器を作るのも悪くない。

液体を集めると、即席でビンを作り、闇にストックしていく。

さて、もつすることもないな。早めに目的地に行くとしますか。

待たせ続けるのも良くないだろう。

それから数時間、俺はひたすら川に沿って、下流へと向かった。

途中、何度もゴブリンと遭遇したので例のごとく、魔力の大剣で木っ端微塵にしてやった。

そして結構、下流まで来て、麻痺液も溜まってきていた頃。

「なんだあ？外が騒がしいなあ……」

この森を抜けた先にある草原からは何やら爆音が響いている…。

おいおい、まさか……いや、それしかないだろう。

俺が立てた推測…それは、火の国と水の国の停戦会議の失敗…。

つまり、再び戦争をし始めたということである。

話に寄れば、水の国の方が譲歩して火の国に出向いていたらしい。

戦争しているということは出向いていた二人の皇女殿下は逃げたのかな？

まあ、いいや。俺には関係ない……………。

この時、俺がこう思ったのは大きな間違いだったことを後の俺は語る。

はあ…、はあ……………クソッ！！

何故、こんな無様な事に……………。

だが、今はせめてシャノン様だけでも……。

そう思い、現在、火の国「アポロニア」から脱出を図る青年の騎士。

「クロ……急いでくれ！」

クロ、と呼ばれた毛並みが整った黒いたてがみをなびかせる漆黒の馬。

クロにまたがる青年の騎士、カイン・ナイツに抱えられている少女は、

水の国の第二皇女、シャノン・リ・アクエスその人である。

容姿は整っており、髪と眼は水色である。

年齢はまだ14だが、十分な美貌を備えている少女である。

しかし、その瞳からは不安と恐怖が伺える。

（お姉ちゃん……………）

この世界、つまりリルバには八大騎士というものが存在する。

それは世界にある伝承になぞった人柄、役割の人物に対し、

その伝承の人物の名前が与えられ、
その騎士にあやかった能力を得るというものだ。

どの伝承とは決まっておらず、私が仕える水の国「アクエリアス」
には、
2名存在している。

それは魔物の国「ロスト」と密接しているためである。

なお、この名前を受け継ぐシステムは、騎士だけに限られたものではないが、
特に有名ながこの八大騎士なのだ。

そして先程まで、水の国代表として火の国を訪れ、停戦会議をしていたのだが。

火の国が異世界から来た少女たちを捕らえ、
その少女のうちの一人は洒落にならない程度の魔力を備えており、
その力を無理やり引き出し、軍事転用に成功した火の国は会議を中止。

会議が中止になった瞬間、水の国から来ていたものは襲われ始めた。
いきなり敵地のど真ん中に放り込まれたようなものだ。

第一皇女のメディナ・リ・アクエス様は八大騎士のうちの二人、ランスロット様とトリスタン様によって、無事火の国を脱出したのだが、

会議が中止された瞬間、別の場所にいたシャノン様とカインは、逃げるのが遅れ、包囲網を敷かれ、更には逃走経路を制限され、必要以上の追手に追われていた。

そして現在、水の国、最西端の迷いの森が見えてきたところだった。

しかし、後ろには数十人程度はいると思われる火の国の追手。

そして、先程から水と火の主な戦場であった、アクア平原の方から爆音が聞こえている。

また、戦争に逆戻りである。

本来、逃走するならばアクア平原のほうが早いのだが、包囲網を敷かれ無理だったのだ。

（しかし、このまま森を抜けれる訳もない…

安全を取るならアクア平原で本隊と合流したいところだが…）

数十人の追手を倒し、更に戦場を突っ切り本隊と合流するほどの力、この青年の騎士、カイン・ナイツは持ち合わせていない。

せいぜい、今となつては追手の数人と戦える程度だろう。

現在、火の国は先ほど話した少女の力で、火の国の兵器、兵士を全て強化している。

そして追手は全てその道の精鋭集団、勝ち目はない。

どうしたものか…と考えていると、徐々に追手達との距離が縮まってきた。

「追え！追えエエ！！！！逃がすなあ！！！」

「ちつ……、リザードマン 蜥蜴人が生意気な……」

基本、火の国に住む者は大半がリザードマンである。

そして、背後から火の矢が無数に飛んでくる……。

「グッ……」

背中が徐々に攻撃されていき、火傷が酷くなっていく……。

「カイン……！……ごめんなさい。……私、役に立てないし、弱いのに……」

何もしてあげられないとシャノンと言い、涙を流す……。

「そんな事有りません。現に私が今生きているのはシャノン様のおかげです。

貴方はこれから国の未来を創っていくお方なのです。何としても、生きなければなりません。

このカイン、この身が朽ち果てようとも姫様をお守りいたします。ですから、どうか泣かないでください……。」

痛みに耐えながら、シャノンを慰めるカイン。

カインは元々、騎士の家系ではあったが真面目ではなかった。というか、もっぱら不良だった。

ある日、カインが街でうろついていると、お忍びで街に居たシャノンは攫われようとしていたところを発見したのだ。

それを助けたカインはシャノンからの指名で専属の騎士となり、カインも次第に真面目に努力し、晴れてシャノンの護衛をしているのである。

（この方だけは…なんとしても守らなければ…）

（俺の命の恩人を…死なせてたまるか！！）

そしてもう後、迷いの森まで数百メートルというところで、カインは森の中に光る剣を持った黒いコートを着た少年がいるのを確認した。

そして、物語は交錯する……………。

始まりの直前（後書き）

感想、評価、誤字訂正がありましたら、是非報告ください。

始まり（前書き）

毎週、投稿が遅くてすいません。

また来週も投稿が遅くなりそうです。

始まり

もうそろそろ森を出ようか…としたところ、
前方に何やら追われている人とそれを追いかける数十人程度の蜥蜴
人たち…。

うーん、これなんてフラグだい？しかも、こっちに向かってきてる
よ…。

流石に俺も面倒ごとになる前に逃げようと思ったとき…、

「その少年、悪いが時間を稼ぐだけでもいいから逃走の手助けを
してくれないか」

なんて念話をされちゃったよ…、トホホ…。

俺としては、平和に光の国に向かうことがいいんだが…、

あの青年の騎士が抱えているのはきつと皇女…たぶん、第二の方かな？

となれば、放っておくのも気が引ける…。

「仕方ない。そいつら全員ぶっ潰すから、こっちにそのままの勢いで来い。」

「本当か！？助かる…。」

自分でも、こんな答えは返しなくなかったんだが…、まあいいや。

となれば、早速迎撃準備だな…。

まあ、俺がさっき考えてた戦法を試してみるのもいいだろう。

そんなに準備に時間も取れないし、単純な奴で行こう。

俺はそれから魔力で川の水を持ち上げると、その水のエネルギーを圧縮し、氷柱…、いや、氷の杭を何百本と作った。

その一つ、一つに魔力で紐を取り付け、
俺が意識するとその方向へ向かうように設定する。

これは碎牙の多大な演算能力がないと、人間にはできないことである。

そしてしばらくすると、
負傷しながらもなんとか森の入口付近まで青年の騎士はやってきていた。

「頼んだぞ。」

「了解……」

それに続いてきた蜥蜴軍団に先程の氷の杭の嵐を浴びせてやる。

蜥蜴たちも生半可な肉体や装備をしていないので、確実に首を狙い、
数百本とある氷の杭を制御し、相手を翻弄し、確実に仕留めていく。

ザク、ザク、ザク……。

見る見るうちにバタバタと倒れていくトカゲさんたち。

おいおい、吐きたいのはこっちだって…、

こんな緑の液体をそこら中にはら撒きながら死ぬなって…。

しかも、全員結局串刺し状態…、おえッ…。

そしてその蜥蜴さんたちの持っていた武器にも魔力で紐を張り、攻撃する。

数分後には全員御陀仏してましたとき。

終わって魔力を解除し、ホッとしていると。

さきほど走り去って行った青年の騎士と黒い馬、王女様が戻ってきていた。

「おお、見事に片付けといたから、これで無事国に帰れそうか？」

「な、何故、国に帰る途中だと？」

それと君が連中を倒すところを見ていたが…君はなに者だい？」

この青年の騎士、たぶん年齢的には俺と同じ程度なのに上から目線…。
潰してやるつか…。

「普通に考えて、蜥蜴は火の国だし、追っかけられるのは水の国だろ？」

んで、まあアンタが名乗ってないのに名乗る気はないって…。
言っても、そのアンタが連れてるのが多分、第二皇女様だからいか…。

俺は異世界？から飛ばされてきたらしい奴で、記憶消失してる奴だ。

名前は黒井海斗…だから、カイトって呼んでくれ。

で、この世界についてまだよくわからんし、魔法が使えないから困ってる。

魔法が使えないからああやって魔力でゴリ押しする戦い方になるんだよ。

………それと、アンタ、たぶん俺と同じくらいの年齢だぞ？
どうせ、15とかその程度だろ？」

どうやら、俺がそこまで言つと自分が失態を犯したことに気づいたらしい。

「ああ、すまなかった。俺はカイン。

こちらに居られるのが、察しのとおり、第二皇女のシャノン様だ。となると、カイトも異世界から選ばれた8人の一人なのか？

…しかし、魔法が使えなくて、あれは凄いなあ……。」

「さあ？よくわからん。どうも、俺は異世界組の中でも一人違うらしい。

んで、まあ、魔法については後回しにして…、これからどうするんだ？

さつきは追われていたが…、このまま森を抜け、断崖絶壁を登るか？

それとも、戦場を突っ切って本隊と合流……ってとこかな？」

「……まあ、今はいいか。

この後、できれば戦場を突っ切って、本隊と合流し、シャノン様の安全を確保したい。

…助けられておいてアレなんだが…、どうか、手助けしてくれないか？」

…普段の俺なら断っているんだろうなあ。

でも、光の国に行くには…これが一番の近道かな？

「…………分かった、手伝ってやるよ。
どうせ、行く宛もないしな。」

「本当かつ！、恩に着る。じゃあ、早速……」

「ちょっと待て、このまま行ったら確実にお前の身が保たないだろうが。」

「少しぐらい休憩してから行くぞ。」

全く、せっかちな奴だ。自分の身体のこととは一番自分が分かっているだろうに。

「…………しかし！！一刻も早く、シャノン様を……。」

「背中は大火傷、体力的にも剣すら触れないだろうとお前が、戦場を乗り切れると。」

「本気でそう思うか？」

「…………無理だろうな、すまん、俺が無謀だった。」

「いや、分かればいい。それにお前、もうちょっと敏感になれよ…。愛しの皇女様が半泣きじゃねえか…。」

えっ、と驚いた様子でカインはシャノンの方を見ると、

そこには目に涙を溜めて、必死に呻きそうなのを堪えている少女の姿があった。

「カイン…、ごめんね。私がこんなのだから心配かけて…。」

いつもあなたばかりに大事なことは任せきりで、守ってもらって…。

私の為に、色々と頑張ってくれてるの知ってるよ、ありがと…。でも…カインが、私の為に無理してるのを見るのは…イヤ…。少しは…カインもカイン自身の事、考えないと…死んじゃうよお…。

私、カインが居なくなったら…、私…。」

シャノンはそこまで言つと泣き崩れてしまった…。

そして、それを見て慌てて駆け寄る、カイン。

「シャノン様…、私などに…勿体なきお言葉…。

シャノン様がそこまで私のことを思っていてくださったなんて、自分は幸せ者です…。

シャノン様、いえ、シャノン…、本当にありがとう。

でも、だからこそ、そんな大切なシャノンを俺は守りたい…。

だから、これから少し休んだら…また無理をさせてもらおうよ…。

…………ごめん。」

ふう…………、全く、なんてものを人前で見せつけてくれるんだ…。

これじゃ、嫌でも二人とも守り抜かなきゃならないじゃないか…。

しかし、騎士と皇女の恋…………美談だねえ…。

「…………えーっ、ゴホン。まだ続きやるんだったら席外すけど?。」

俺がそう言っと、二人とも顔を赤くし、シャノンはカインの後ろに隠れてしまった。

「い、いや…、もういい。」

それで、休むといっても魔法が使えないのにどうするんだ？」

「ああ、それなんだがな。」

応急処置として、俺の魔力でお前の背中の火傷を外気に触れないようにしようかなと。

じゃないと、火傷は処置が難しいからな…。

雑菌が入ると不味い。」

「それはありがたいが…、そんな事できるのか？」

「ん？ああ、何やら魔力はやたら多いらしいんでな。」

俺はそう言つと早速、カインの背中に魔力で膜を張り、戦場を乗り切るために今は休めと言つて、一旦離れる。

ここで魔力で行えることについて少し訂正しようと思う。

物体移動、波動、結界を張るなどがあるが、これは全て正しくはない。

砕牙で解析したところ、この世界の人々には元より魔力…仮に、アイデアとでも呼ぼうか。

アイデアが備わっている。しかし、それは生命エネルギーなどではなく、

この世界の恐らくどこにでも存在する気体、イリスに対する干渉力である。

アイデアが大きければ大きいほど、イリスに対して幅広い干渉できる。

そしてイリスは、いくなれば万能な気体である。

アイデアの干渉力によって、その分子は自由に操作される。

例えば、俺が今、水を作ろうとアイデアを行使し、イリスに干渉したとしよう。

そうすれば、イリスは水になるべく、その配置を変え、融点、沸点すらも変更し、
アイデアを行使した者のアイデアの干渉量、干渉力の分だけ水を生成するだろう。

しかし、ここで重大な問題が生まれる。

果たして、俺とこのリルバの者達が、仮に同じ干渉量、干渉力でイリスに干渉しても

そこには恐らく、天と地の差が生まれる。

何故なら、先程の例、水をイリスで生成する…ということだが、

俺の元いた世界、イブの場合とは根本的に違う。

化学反応には違いないが、

この世界の人たちは本当に水がどのようにして出来ているのか、知っているのだろうか？

答えはNOだ。今、こうして俺が化学的な思考で魔力や魔法について理解していて、

それでいて、俺の魔力は純粹な濃度の高い魔力。

これは決して異世界出身の恩恵などではない、存在に対する理解度

の違いからくる、

アイデアの干渉力の違いだ。

だから、きっと俺の使う魔力と呼ばれるものは、
本来のイリスがあるべき姿なのだ。

よって、イリスはアイデアによって干渉され、イリスは全ての対象に
干渉できる。

その結果、物体移動（物体に対して）、波動（物体が空気に対して
行なった行動）、

結界を張る（その空間に対して）事ができる訳だ。

現時点で俺が解説できる事はこの程度しかない。

生物に対して、イリスがどのような干渉が出来るのか、

それについてはまだ不明だ。

俺の持つ、闇の力についても不明。

それに、魔法の中には詠唱が必要なものがあるらしいから、

それについても不明。

まして、精霊なんてわかったもんじゃない。

どちらにせよ、今の俺はこの世界について学ぶ必要があるといつとだ。

それからしばらくして…

「さて、もうそろそろ行けそうか？カイン」

「ああ、カイトに張って貰った結界のおかげで、なんとかいけそう
だ。

だが、どうやって戦場を切り抜けるんだ？」

「ああ……、それなんだが……。」

「……はぁッ！？いえ、すまない。だが、本当にそんなことが……」

余りにも信じられなかったのか、カインが大声を上げる。

「まあ、任せなつて」

それから30分後、俺たちは戦場へと赴いた。

始まり（後書き）

ご意見、感想、指摘、誤字訂正がありましたら
報告していただけると、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2808y/>

セカイはカワラナイ

2011年11月27日19時56分発行